

元サラリーマン技術誌編集者のレポート(Report from ex-editor of company's technological journal) ——正確で根拠ある情報をめざして——

英ドキュメンタリー映画「地球温暖化詐欺」
——CO₂人為説を否定する科学者達の証言——

および

宇宙線雲形成促進説と太陽活動をめぐる動き

The Great Global Warming Swindle
--Scientists against Man-made Warming Theories--

&

Trends around the Cloud Formation Theories by Cosmic Ray
And the Effects of Solar Activities

2016年12月 日

映画「地球温暖化詐欺」は、英テレビのチャンネル 4 で、2007 年 3 月に放映されたドキュメンタリー・フィルム（DVD international 版）を基に、Wag TV England の許可を得て本の形で再現したものです。

この映画は、英国議会の上院に、人為的地球温暖化説の科学的根拠を調べる調査委員会が 2005 年に設立されたことを報じるところから始まるもので、気候変動に対する通説（CO₂ による人為説）に対し批判的な立場が貫かれております。日本では公開されていないと思いますが、今ではインターネット上で見ることができます。しかしながら、この内容を正確に理解することは結構専門的用語がつかわれたりしており少し難解な映画といえます。とりわけ、18 名もの多くの方が登場します。このリストを見ていただければわかりますが、ほとんどが大学や研究機関の物理、地球、気候、生物、宇宙、などの専門家で、さらに政治、経済、環境活動家なども加わった多彩な顔ぶれです。この方たちの証言が、沢山のシーンの中に断片的に表れます。次々と現れるまったく疎遠の人の顔、特に西洋人の顔を的確に認識して筋を理解していくことが難しいのです。そこで人物の画像（顔）とともにセリフや語りを集めて静止画に変換をしてみたところ、驚くほどの効果が得られることが分かりました。

この映画のロジック、盛り込まれた内容密度が濃いこと、また人為的地球温暖化説の問題点を網羅していることが分かりました。即ち、地球の気候が二酸化炭素により左右されているという科学的証拠が不在である一方、黒点で知られる太陽磁場活動とは一致。また、地球温暖化問題の政治化がサッチャー時代に始まること、これが国連の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」に発展したこと、環境運動家との合流と弊害、政府助成金の増大、コンピュータによる気象予測とヒステリック報道、IPCC の報告書の信憑性、アフリカの発展の阻害となっていることなどに言及しています。

この映画が、広く世界に波紋を投げかけたということもうなづけます。いかに学問が進み、スーパーコンピューターの性能が上がろうが、気候変動などという多面的な因子の関与した事象が簡単に解明できるとはとても信じられません。地道な知識と知見の積み重ねで進歩が続くものと思います。だから、賛成反対の議論はあって当然で歓迎すべきと思います。ただし、それには議論の対象が正確に理解されていることが大前提です。動画というのは、音楽と同じで、一瞬現れては次の瞬間消えてしまいます。この本がこの問題の議論の進展に役立つものと思っています。

この映画の一番の主眼点は、気候変動の原因が CO₂ の温室効果よりは太陽活動（太陽風あるいは太陽磁気活動）にあるといっているところだと思います。

宇宙線の雲形成促進説と太陽（磁場）活動という言葉の中身は映画の中でも説明がないので、少し補足しておきます。宇宙空間は星の一生の最後に起こる超新星爆発を起源とする高エネルギーの宇宙線（非常に高速で動いている水素やその他元素の原子核）で満たされ、地球を含む太陽圏はこの襲撃にさらされています。地球への宇宙線の侵入は太陽の磁場（太陽風）により防がれていますが、太陽活動が低下すると（黒点が少なくなると）地表に到達する宇宙線の量は増加します。この宇宙線は地球の大気と衝突し二次宇宙線を生成し、この中の高エネルギーのものが大気中の分子などに衝突して大量のイオンを発生させます。これが核となって雲の水滴へと成長し、雲量を増大させ太陽光を反射させます

(アルベド効果)。気温に対する雲量の変動効果は太陽の光の強さ自身の変動よりずっと大きいので、寒冷化させます。スベンスマルクは1990年代にこの宇宙線の量と雲量に密接な関係のあることを見出し、太陽活動—宇宙線—雲—気候説の確立へつながってきました。

横浜シンポジウム「気候変動原因は何か」：私は、2014年3月31日に横浜市開港記念会館で開かれた、この太陽活動をも含めた広い観点から「気候変動の原因は何か」を議論しようというシンポジウムを聴講する機会に恵まれました。デンマーク国立宇宙センター太陽・気候研究センター所長のスベンスマルク氏の基調講演に加えて、室田武氏（京大理学部・大阪大学経済学部卒、同志社大学経済学部教授、総合司会）、桜井邦朋氏（神奈川大学名誉教授、元NASA上級研究員）、丸山茂徳氏（東京工業大学生命研究所教授）、宮原ひろ子氏（武蔵野美術大学、元東大宇宙線研究所特任助教）、戎崎俊一氏（理化学研究所 戎崎計算宇宙物理研究室）という太陽、宇宙などの研究の第一人者による宇宙気候学の最先端情報が披露されました。そして、太陽活動を巡る研究は、英映画ができた7年前から飛躍的に進んでいることを知りました。この概要を示すと以下のとおりです。

室田氏は、「気候変動とその要因の議論と歴史と問題提起」と題し、19世紀から今日に至る気候変動とそれを引き起こす要因・議論に関する歴史的なサーベイを、太陽活動研究の推移、二酸化炭素説の浮上経緯、低炭素社会の名による原発推進政治などについて示されました。ここでは太陽活動の話の要点のみ紹介しますが、太陽の黒点は1600年ごろに発見され、それ以来黒点の観測は今日まで続き、黒点の数が11年周期で変動することや天候との関連がありそうということなどが議論されてきたが、19世紀までは科学的に明らかになることはありませんでした。しかし、1976年に、アメリカの天文学者エディが、16-7世紀の寒冷期（マウンダー極小期）の宇宙線の強さと気温を（木の年輪により）分析して、太陽活動（黒点数）—宇宙線—気温の関係を明らかにして大きな進展がありました。しかしながら、この時点では宇宙線あるいは太陽活動により気候変動がなぜ起きるかの因果関係は分かっていませんでした。これが明らかになってきたのは1990年代に入ってからで、これに火をつけたのがスベンスマルクですと述べています。

太陽研究の第一人者である桜井氏は、「太陽活動から見た地球温暖化」の題の講演の中かで、「…、太陽活動は1960年ごろに極大に達して以後は停滞しており、2010年頃には“無黒点の時代”とよんでよいような太陽活動の極端な衰退期にはいってしまっている。…こうした状況が今後20年、30年と長期にわたって続くような事態が生じたら、地球環境は温暖化どころか、寒冷化へと突き進んでしまうかもしれない。このことと因果的に関わりがあるのかどうか不明だが、地球温暖化の傾向は1999年以後、止まってしまっている。この結果は、地球全体にわたる二酸化炭素(CO₂)の単調な増加傾向とは相いれないことが明らかである。」（パリティ、Vol.27 No.06, 2012-06）と明快にご自身の見解を述べられています。

スベンスマルク氏の特別基調講演「天の川銀河と地球気候」は通訳付きで行われ、宇宙線—雲形成—気候変動という仮説の検証がいかに進められてきたかを詳細に説明されました。少し詳しく内容を紹介しますと、講演は、6500-9500年前のオマーンの洞窟の鍾乳石の調査データで得られた太陽活動(C14)と水温(O18)の関係、また過去千年の気温と太

陽活動（C14）の変動が一致するなどの過去のデータの検証から始まり、太陽圏、宇宙線シャワー、太陽の11年周期と宇宙線強度および低層雲の相関の説明が行われました。宇宙線一雲のメカニズムについては雲の核になるエアロゾルの発生はCERN（欧州原子核研究機構）での実験でも確認でき、さらに実際の大気中でも雲の核まで成長することが示されました。これは、太陽コロナの自然実験から調べたもので、太陽表面に強い爆発が起ると、これにより生じたプラズマ放射が宇宙線を遮蔽（防御）するため、宇宙線強度は急低下して、数日遅れて雲の液状水分が急低下することが観測されます。このことから、このような雲への成長の仕組が実際に働いていることが分かったと話されています。

続いて地球と生命体への影響についての話では、まずこの宇宙線一雲形成の仕組が21世紀の温暖化にどのような関わりを持つかを、このモデルによる21世紀の気温推定行った結果を示されました。結果は従来より気温上昇が小さく太陽活動によってはほとんど上昇しないところもあると図示されました。

さらに過去5億年前にさかのぼっての星間プロセス（超新星爆発）の地球の生命体への影響についての話では、宇宙線侵入に対して太陽活動は10%影響するにすぎないが、超新星爆発などの星の形成は100%と大きいことを説明してから、散開星団分布から5億年の宇宙線の変化を調べた結果、5億年間の超新星活動と氷河の推移はよく一致し、超新星の活動の極大期は寒冷期と一致することが分かった。また、過去2億年の貝の化石から得た海水温度の推移と超新星活動の推移も一致する。

さらに、生命体にとってなぜ寒冷期が重要かの話では、まず寒冷気候は、極地と赤道間の温度差を大きくし、強風をもたらして海を攪拌して栄養分を富ませることで生命体の発生を促す。海中の生物生産性の指標であるC13の推移と超新星の推移もよく一致し、超新星活動の大きい寒冷期にはC13の値も高く、生物生産性が大きかったことが分かる。この結果が46億年の地球全体について言えるかの検討も、太陽の進化から再現してみた。その結果は、太陽活動は20億年前近くと10億年前近くで極大を示すが、これは銀河星団の形成過程（銀河同士の衝突が宇宙線の発生を促す）から説明でき、この極大の時期は氷河の発達が顕著で、また生命体の発生も盛んである。これから、地球の気候と宇宙線は密接に結びついていることが分かったと話されています。

結論はつぎのようにまとめています。①宇宙線に変動が起こるたびに気候も変動していたことが分かった。②雲がカギを握っているようである。③宇宙線の仕組については、実験でも観測でも確かめられた。④それにはイオンとエアロゾルの形成が関与していた。⑤宇宙線と気候の関連性に理解が深まると、地球上の生命体の変化にも理解が深まることが分かった。

東工大地球生命研究所の丸山氏は、「21世紀の気候変動予測と国際政治」の題で話されました。過去200-1000年の気温変動あるいは6億年前に起きた全球凍結（地球が赤道まですべて氷におおわれる）の現象はCO₂温暖化主因説では説明できず、宇宙線一雲効果が主因と考えられるとこの説の支持を表明しています。さらに、温暖期から寒冷期への移行時期には気温の低下よりも海水温の低下が遅れるために降水量が増え、偏西風の蛇行も大きくなり異常気象の多発を招くことが詳しく説明されました。また、世界の人口予測と食糧問題については、2050年に人口増加のピークを迎えるので、この30年間をどう乗り越えるかが一番の課題であるといわれました。もし寒冷期に入るようなことになれば食糧自給が最大のテーマになるのは明らかです。温暖化の対策だけでなく、太陽からの警告を率直

に受け止めて寒冷化への準備・対策も考えておかねばならないと思います。

宮原氏は、「太陽環境と地球の気候」の題で話されました。最新の研究では、太陽の磁場構造の解明が進み、地球を守る太陽圏のスパイラル状の磁場の帯は、太陽活動活発の時は立体的に宇宙線が侵入しにくいが、不活発になると平面的になり侵入しやすい。また、太陽に 11 年周期の極大の時に太陽の磁極の反転が起こることを考慮すると 22 年周期が重要であり、実際にマウンダー極小期の気温は 26–28 年周期（この寒冷期の周期は 13–14 年に伸びていた）で大量の宇宙線がおしよせていたことも分かったそうです。

戎崎氏は、「宇宙線・雲関係と気候変動」の題で講演され、宇宙線が大気に衝突してできた雲の核（エアロゾル）が雲にまで成長する過程についての厳密な検証結果を示されました。海洋上の対流層についてのエアロゾル密度のローゼンフェルトらの研究、また大西洋を四つの領域（海上清浄域、煙域、ダスト域、汚染域）に分けて海上の低層雲のエアロゾルの解析を行ったカウフマンらの研究をもとに論議を進めるとともに、小氷期の寒冷化や最近の温暖化の温度変化は、銀河宇宙線強度が太陽風の強さの変動により数十パーセント変動し、海洋における硫酸エアロゾルの数密度が 10% 程度変動（スペンスマルク効果で期待される変動量）したことで説明できることなどが報告されました。これらのことから、スペンスマルク効果は現在の地球で気候変動の重要な要素として働いていると結論されています。

結局、人類の歴史という時間スケールの中では、地球の気候変動の鍵を握っているのが太陽磁場活動であることはますます確かさを増してきておりまぎれもない事実になりつつあると思います。そして、これは先の英映画の主張とよく整合しています。

直近の太陽活動の異変：ところで、今、専門家が注目する一番ホットな問題はこの太陽活動の指標となる黒点出現の周期が通常の 11 年から 12.7 年に伸びたことです。2007 年中ごろに終わるはずのサイクル 23 が 2008 年 12 月までずれ込みました。専門家は、この周期のずれ込みが 17 世紀に起きたマウンダー極小期の始まりと同じであることから、寒冷化の可能性があり、この次のサイクルの動向が極めて重要であるとも言っています。この太陽活動周期の乱れは実に 200 年ぶりのことだそうです。宮原ひろ子氏は一昨年出された本の中で「2007 年の春に開催された学会で、ひょっとするとひょっとするかもしれないなどと笑いながら話していたのが、2008 年の春の学会ではみんなの表情が一変していた記憶があります。」（「地球の変動はどこまで宇宙で解明できるか」化学同人、2014）と書かれていますが、これも直近の太陽活動の異変の重大性をよく伝えていると思います。

プラズマ・核融合学会誌の 2014 年 2 月号は「宇宙気候学小特集」を掲載しています。「宇宙気候学」は、我々の生存環境が実際に宇宙から様々な影響を受けていることを科学的に探る新しい学問領域であるとの記述から始まり、現状と課題、太陽活動と地球環境変動、大気電気学、宇宙線による微粒子形成に分けて 7 本の論文で構成されています。この終わりの将来展望の中で、「宇宙気候学が重要となるもう一つの理由は、現在の太陽活動の特異性にある。現在の太陽活動周期（サイクル 24）の黒点活動は過去数十年間で最低になる可能性が高い。それゆえ、太陽活動は 20 世紀後半の非常に活発なフェーズ（大極大期）から静穏なフェーズへ移行しつつあるのではないかと多くの研究者が考えている。もしそうで

あるならば、我々は、これから太陽活動の長期的変化が地球環境にどのような影響を与えるかを精密に測定できる貴重な機会を得ることになる。それ故、今後数十年に渡って太陽活動と地球気候の変動を注意深く観測し続ける必要がある。」と学会としての見解が明瞭に述べられていることは注目に値すると思います。

日米韓の学校理科教科書の比較：ところで、温暖化論争が学校理科教育にどのような影響を与えていたかについて、東京大学大学院教育学研究科の鄭 允貞氏が日韓米の教科書の比較研究を行っています（同紀要 第 50 卷、2010）。詳しく分析されているのですが、さわりだけを紹介すると、韓国と日本の教科書は、温暖化の原因について人為的な面を中心に説明しているが、両者とも自然的な現象であるという側面には言及していない。韓国のみが、地球温暖化の結果、気象異変や海面の上昇、生態系変化の発生していることまで詳述している。米国は、日本や韓国に比べて地球温暖化に関連した内容は極めて少なかった。理由は、地球温暖化と関連した科学的事実はまだ議論の余地があり、その影響と解決策などは科学教科書で扱うほどの性格でないという判断のためとみられると、三か国間の違いを述べられています。

また、全体として見たとき、科学教科では温暖化の起きる原因とその過程までだけを扱う場合が多いが、その理由は、「地球温暖化現象について今まで科学的に検証され、多くの専門家たちが合意した事実は、温室効果ガスによる温室効果が発生するという事実だけであるためである。」換言すれば、「地球温暖化が人間活動によって発生したかどうかや、地球温暖化の結果、地球や人類にいかなる被害が発生するかなどについては暫定的に予測した結果であって、科学的に検証されたということは難しいということである。」と“科学的事実”と“予測結果”的違いを明瞭に指摘しています

昨今の報道は人為的地球温暖化説一色で、その内容も予測結果が圧倒的に多いと思います。CO₂ 温暖化説を根拠とした机上の計算を 100 年先まで外挿して得られた推論にすぎないものを、議論の余地のない科学的事実とみなして、国を挙げて CO₂ の削減の実行動をすすめている姿ばかりが報道されています。科学的事実の探求に没頭している研究者の中には人為的温暖化説に反対の方々も大勢おられるのでしょうか、その声はほとんど聞えてきません。本当に無視してよいのでしょうか。

新聞の報道の切抜き：私がとっている日刊の全国紙（M 紙）が地球温暖化問題をどのように報じているかを知りたくて関連のニュース記事の切抜きを 2014 年 3 月ごろから始め、2016 年 8 月までの 2 年 5 ヶ月間ほどの間で 61 枚の記事スクラップが集まりました。取りこぼしもあったでしょうし全く厳密ではないのですが、傾向をつかむのは差支えないと思います。

大ざっぱに分類してみると、COP21（国連気候変動枠組条約第 21 回締結国会議）などの世界の動きを報道するもの 28 件、日本政府の動きが 13 件、CO₂ 排出量や気温、異常気象などの報道 19 件、石炭火力などのエネルギー関連 8 件、社説や分析・解説記事 8 件、啓蒙記事その他 7 件でした。これらの記事内容は、一言でいえば、国連の COP を頂点とする CO₂ 削減の枠組みへの対応を頂点とした図にきれいに収斂します。そしてすべての記事が、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)が提唱する「このままいくと今世紀末には平均気温が 4°C も上昇し大変なことになる」との予測を前提にしています。社説でも、対策を早急に実行することが“世界に貢献することであり”“G7 の責任である”ということばかりに終

始しています。念のいったことだと思いますが、くらしナビ・科学欄には「温暖化予測日本人が貢献—IPCC ノーベル平和賞受賞後押し」と 1960 年代からのコンピュータ・プログラム開発の系譜の紹介記事も誇らしげに掲載しています。確かにこれは一つの業績であるのは間違いないのですが、あくまでも一つの予測（手法）にすぎません。

結局、これらの記事全部が、科学的事実の根拠の検証抜きにして IPCC の説をそのまま受け入れるところから始まっています。いわば IPCC の広報室の発表記事と見間違うほどです。しかしながら、ここで紹介した太陽一宇宙線一雲一気候説あるいは直近の太陽活動の異常など、近い将来の地球の気候に重大な影響があるかもしれない事象などについては一つも報道されていませんでした。国連の会議も大事でしょうが、実生活に直結する可能性の強い観測事実などもこれに劣らず大切で広く知らされるべきものではないでしょうか。

異常気象の映像：テレビ報道をみても、一例をあげますと NHK スペシャル（2016 年 9 月 4 日 BS 放送）の MEGA CRISIS 巨大危機 第 1 週「異常気象との闘い」では、最近の台風の大型化や発生数の増大、局地的な豪雨などの異常気象の原因が温暖化による海水温度の上昇によるもので、このままいけば温暖化はさらに進行し、今世紀末には平均気温が 4°C、都市では 40°C を超えて生活できなくなるなどとショッキングな映像をバックに報じてあります。このような番組は過去にも再三見た記憶があります。でもこれはホントでしょうか。信じてよいのでしょうか。

ここで紹介する英国の BBC で 2007 年に放送された映画では、ご覧のとおりで、“嘘だ”という合唱で片づけられています。横浜シンポジウムでも、スベンスマルク氏は講演の中で「寒冷気候は、極地と赤道間の温度差を大きくし、強風をもたらして海を搅拌して栄養分を富ませることで生命体の発生を促す」と異常気象は寒冷気候の現象だと話しています。

続く講演での丸山氏は、講演要旨の中で次のように書いています。
「過去 100 年間続いた温暖化のために海洋表層に蓄えられた潜熱層（高温）が、最近の冷却（寒冷化）の開始によって冷えた海洋表層（数十メートル）と入れ替わり、一方では、寒冷化した大気との温度差が増大することによって水蒸気量が増加し、故に雲量が増え、降水（雪）量が増加すると予測される。一方で、気温のピーク（西暦 2000 年ごろ）が過ぎ低温化し始めたが、湿度のピークはまだ到達せず、今後到来することになる。湿度のピークに達するまでは、太平洋の表層の高温海水は、一方通行で北極海に流れ込み、北大西洋へ抜ける。その為に、北極海の氷床は夏場（9 月）に薄くなる。一方、南極の氷床は拡大し、南極大陸の周辺部で活発に海洋へ崩落するだろう。偏西風の蛇行は、固定された観測点から見ると、夏はより暑く、冬はより寒くなる地域性を助長することになる。これは江戸時代後期のマウンダー小氷期の気候の記録にも顕著に残されている。」

この最後の記述に挙げられたマウンダー小氷期の記録については、講演スライドでは、ワイオミング州フレモント氷河高原での酸素同位体分析による気温の変動幅の推移で説明されました。温暖期では気温の振れ幅（酸素同位体比のぶれ）は小さいのですが、1600 年代の小氷河期になると急激に振れ幅は数倍に大きくなり、1800 年代の温暖期まで続き、その後はまた気温の振れはもとのように小さくなります。このことから小氷河期の寒冷化時代は、異常気象（夏はより暑く、冬はより寒く、降雨・降雪量の増大）が多発していたことが裏付けられていることが分かりました。

テレビ報道の異常気象が将来の温暖化の加速とどのような因果関係でつながるのかの説

明はなく、何とも言えないのですが、少なくとも異常気象が温暖化の進行だけでなく、寒冷化への転向でも起きると予測されることが分かりました。映像での報道が大衆の感情に与える影響の大きさを考えると、これまでのような一方的に CO2 温暖化説のみに基づく番組制作でよいのか大変心配です。

月刊総合雑誌：私は、数年前 IPCC 第 5 次報告書が出るころの岩波書店の月刊誌「世界」に載った地球温暖化関連の掲載論文が IPCC 擁護べたりのもので、その気候変動原因が CO2 人為説に反対の立場の人を懷疑論者として切り捨てるところから始まることに大変驚きました。この月刊誌は権威を恐れず、優れた政治経済の論評が掲載されていると大目に読んできたのですが、科学に関しては全く目が届いていないのではないかとたいへん落胆しました。一時は購読をやめようかと思ったほどです。編集長宛てに私の疑問を書いて、生まれて初めてでたった一度の経験ですが、資料と一緒に送った記憶があります。当然返事はありません。そしてその後も同じ趣旨の論文、特集が続いています。

その後、私は、地球温暖化防止の推進に日本の経済学者の第一人者の一人である宇沢弘文氏が大きな役割を果たしてきたことを知りました。元岩波書店社長の大塚信一氏は、「宇沢弘文のメッセージ」（集英社新書、2015 年）の中で、アメリカのみならず、1991 年以降はスウェーデンの研究所で研究をつづけ、数々の国際会議の中で提言・活躍されてきた様子を紹介されています。宇沢さんは、内橋克人氏との対談（「始まっている未来ー新しい経済学は可能か」岩波書店、2009 年）で、炭素税導入の話の中で「私の提案が、特にヨーロッパや発展途上国諸国の経済学者たちの間で、圧倒的な支持を得て、それを基本に国際会議開催の機運が起こり、京都会議（1997 年）につながっていくのです」とご自身の口から語られています。日本のみならず世界のリーダーとして活躍してきた姿がうかがえます。

しかし、宇沢氏の発言の中に引っ掛かるものがあります。それは、「地球温暖化を考える」（岩波新書、1995 年）の中で、宇沢さんは「いま世界で最先端に立って研究をされているのが真鍋淑郎博士です。…巨大コンピュータを駆使して… 大気温度の変化についてくわしく分析するものです。」と紹介し、つづいて、「IPCC の報告もじつは、真鍋博士の研究が最も重要な根拠のひとつとなっているのです。」と書かれています。この真鍋氏のコンピュータ解析に対しては大気の物理学の法則を無視しているなどの反論（梶田敦「CO2 温暖化説は間違っている」2006 年、ほたる出版）があること、さらに、前述のように、これはあくまでも予測であることを考え合わせると、IPCC あるいは COP21 などの国連の動きの基盤そのものに対する疑問を感じざるをえません。

室田武氏は、宇沢さんが亡くなった翌年に出た現代思想増刊号「総特集宇沢弘文」（2015 年 3 月）の寄稿文の中で、次のように書かれています。宇沢先生は 1980 年頃から地球温暖化を意識し始め、1992 年の国連のリオ宣言に応えるべく二酸化炭素地球温暖化論を強調する著作を刊行してきました。しかし、地球温暖化といった問題を正確にとらえるのは容易ではなく、「リオ宣言（1992 年）以降の気候変動の議論が、科学的根拠のあいまいな温暖化政策になってしまい、宇沢先生もこれに完全に巻き込まれてしまった、というのが私の印象である。」と書かれています。さらに、室田氏は、数理経済学の巨人で、正義感の強い宇沢先生が、数々の業績のかたわらで、「社会的共通資本の一部と考えた大気について、二酸化炭素による温暖化の脅威の到来という単純な思い込みに囚われてしまった」ことが悔やまれると結んでおります。

初めに述べた「世界」に掲載された温暖化の記事が IPCC 説に立脚したものである理由

も、岩波書店と宇沢さんとの結びつきが強かったこと、宇沢さんの二酸化炭素説に対する思い込みが強かったことを考え合わせると、なぜこんなことになっているのか分かったよう思います。

新聞、テレビ、雑誌のどの分野を見ても IPCC の「今世紀末に 4℃ ぐらい気温が高くなる」というご宣託をベースに展開されています。そして、この元は、もしかすると日本人研究者の関与が大きかったかもしれないことがうかがわれます。深井有氏は、気候変動を脅威と考えるあるいは人為的温暖化説を信じる人の割合は日本が飛びぬけて高いことを指摘していますが（「地球はもう温暖化していない」平凡社 2015 年）、この日本の世論の際立った動きも上述のような背景が影響しているのかもしれません。IPCC 参加研究者数は第 4 次（2007 年）から第 5 次（2014 年）で半減していること、また人為説に反対の科学者も米国などには大勢いることを横浜シンポジウムで知りました。海外では IPCC への信頼性が減って変化の兆しが見えるのに、日本での現状は、太陽活動—宇宙線—雲—気候説はまさに “四面楚歌” の状態に立たされたままであることです。科学は、政治経済により歪められていると云えるのではないかと思います。

寅彦・漱石の言葉そしてブリューゲルの絵：物理学者の寺田寅彦が亡くなって 80 年の余がたちますが、昭和 10 年の随筆「自由画稿」（中央公論）の中で“政治と経済”について次のように書いています。少し長いのですが温暖化論争を考えるうえでも参考になると思い引用しておきます。

「政治経済といったようなものがいつのまにか科学の応用としての工業産業と離れて分化するような傾向を取ってきた。科学的な知識などは一つも持ち合わせていなくても大政治家大法律家になれるし、大臣局長にも代議士にもなりうるというような時代が到達した。科学的な仕事は技師技手に任せておけばよいというようなことになったのである。そうしてそれらの技術官は一国の政治の本筋に対して主動的に参与することはほとんどなくて。多くの場合には技術にうとく理解のない政治家ないしは政治屋的為政者の命令のもとに単に受動的にはたらく『機関』としての存在を享受しているだけである、と言ってもあまりはなはだしい過言とは思われない状態である。」さらに、「科学に関する理解のはなはだ薄い上長官からかなり無理な注文が出ても、技師技手は、それはできないなどということはできない地位におかれている。それでできないものをでかそうとすれば何かしら無理をするとかごまかすとかするよりほかに道はない、・・・」と続いています。日常の出来事を見聞していると、この状況は現代でも全く変わっておらず、同じことが繰り返されていることが分かります。ここでは、寺田寅彦は“科学”が全く受動的に“非科学”的な奴僕（ねぼく）になっていることに対して強い警句を残しています。

寺田寅彦は、熊本高等学校（明治 30 年頃）のときにここに赴任してきていた夏目漱石先生に俳句の教えを乞い、以来師弟関係は一生つづくこととなります（俳号：冬彦）。漱石は寅彦に俳句を教え、寅彦はまた漱石を自分の研究室の地下実験室で「光圧の測定」を見せたりしたそうです。漱石は科学についても深い理解を示していたと書いています。昭和 7 年の随筆「夏目漱石先生の追憶」（俳句講座）の中で、寺田寅彦は「先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わったというだけではなくて、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わった。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものを見分け、そして真なるものを愛し偽なるものを憎むべきことを教えられた。」とかい

ています。

現代の利や名譽の追及に明け暮れる風潮の社会の中では、とりわけこの寺田寅彦の“非科学の奴僕になるな”という言葉と、夏目漱石の“真なるものを愛し偽なるものを憎む”という二つの言葉は忘れてならない珠玉の言葉として輝いています。

ところで、16世紀のフランドルの画家ピーター・ブリューゲルの絵に「盲人の寓話」というのがあります。盲人の貧者の群れを盲人のガイドが案内して崖に行くという恐ろしい絵です。今の世の中、いやいつの世でも変わらないのでしょうか、人類は真なるものを求めて集団で漂泊しているように思います。迷える大衆を導くのが政治・経済などの社会のリーダーであり、報道機関の役割もあると思います。真と偽のいりまじる混沌とした今の世の中を的確に導くガイドの資質が問われて当然だと思います。温暖化論争にしても、ガイドとなるべき人がもし本当に科学的知識が欠如し科学的判断ができないとすればそれはブリューゲルの世界になりますし、もし知つていながら盲人のふりをしているのならそれはまさに英映画のタイトルにもある“詐欺”になります。いずれにしても、マスコミも含めて社会のリーダーの果たす役割は極めて重いことが分かります。

人間は、人間である以上判断ミスを犯すことは免れないと思います。しかしながらこれを恐れていては前へ進めません。間違いを間違いと認めること、即ち反省のできる社会であることが求められるのではないでしょうか。私は、理性に基づく反省の大切さを、「啓蒙の弁証法」(ホルクハイマー、アドルノ著、岩波文庫)から学びました。第二次大戦のナチスの反ユダヤ主義の狂乱の反省から生まれたもので、理性の生命である反省作用の大切さが語られています。私の考えでは、反省の欠落した(出来なくなった)社会ではその文明は崩壊することを免れないと思います。福島の原発事故以来、原子力の巨大エネルギーの魅力にとりつかれた人類が、人間の手で作りだした物によって人間自身が支配されてきているさまが明らかになりつつあります。同様に、一介の計算機にすぎないコンピュータが人間の心まで支配する世の中になってきているように思います。科学に対する正しい理解と人間性をそなえた現代の寺田寅彦の出現がのぞまれます。

おわりに：スベンスマルクの理論を紹介した本（「不機嫌な太陽」恒星社厚生閣）が日本で出版されたのは2010年ですが、私もまた、新聞の書評欄で知ってこれを読むまでは、CO₂地球温暖化説に全く疑問を持っていませんでした。宇宙線のことはもちろん太陽活動、銀河系構造もろくろく知らなかった者にとっては読みやすいものではなかったのですが、再三読み返して得られたその内容はこれまでの考えを一転させる素晴らしいものでした。

「地球の表面近くまで侵入してきた宇宙線が大気と衝突して雲の核を作り雲を形成し、雲が太陽光を遮ることで地球が冷却する」という星から雲、雲から気候というメカニズムの斬新さに驚くと同時に、この理論が地質学、海洋学、考古学等の広い範囲の研究の進展と呼応・補完し合って数十億年前からの地球の歴史を、生命の誕生から人類の発生まで含めて合理的に説明できることに驚嘆しました。地下からボーリング採取された試料に刻まれた宇宙線の信号から、数十億年の気候の変動・歴史が紐解かれていくさまはまさに夢のようです。

まず、過去数千年の近過去では、宇宙空間から来る高エネルギー宇宙線の量はほぼ一定とみなせるので太陽活動のみに影響されると見てよい。このため、太陽黒点のほぼ11年周期の変動や、1700年ごろの小氷河期のような長期間の不活発化といった太陽活動の不規則な変動により気候が左右されると考えられます。一方、宇宙的なスケールからは、

現在の太陽（地球）は渦巻き状の天の川銀河の周りの数本の明るく輝く腕と腕の間の暗いところを通過していますが、約一億数千万年の周期でそれぞれの腕と交差すると考えられています。このため、明るく超新星爆発などによるミューオン（高エネルギー宇宙線）の多い腕の中を通っているときは地球に届く宇宙線が著しく増大し、寒冷化を招きます。地質学者らは地球全体が氷で覆われる全球凍結が7億5000万年—5億8000万年前の間に3回、24—22億年前の間に2回生じていることを見出していますが、これらは銀河同士の衝突などによるスターバーストがあったためと考えられているそうです。自然のダイナミックな変動は想像を絶するものがあることを知りました。

私は、これまで地球（あるいは太陽）が宇宙空間のどの場所を通過しているかなど知らなかつたし、全く気にもかけていませんでした。しかし、スベンスマルク説の発見のおかげで、現在の地球が、たまたま温暖な気候をもたらすところにあることが幸いして、平穏に暮らすことが出来ていることに気が付きました。同時に、地球の気候は宇宙から切り離して考えることは出来ないし、横浜シンポジウムの中でも語られているように、これからは宇宙気候という一回りも二回りも大きな枠の中で考えていかなければいけないことが分かりました。“権威を排し、事実に照合しての考察”という科学の基本精神に常に立ち返ることが進歩につながるのだと思います。

英映画の中で、英國上院の人為的地球温暖化の科学的根拠の調査委員会を主導したローソン卿は、「私が驚いたのは、科学がいかに弱く、不確かなものであったかということでした」と語っています。非科学が科学を奴僕にすることは許されないのは当然ですが、科学自身がもっと襟を正して毅然とした態度を示せば、非科学、即ち政治経済などの社会のひずみの是正にもつながると思います。ローソン卿の云うような“弱く”、“不確か”な科学から、強く、確かなものと言われるようにしていかないといけないのでしょうか。

（増尾誠）

英ドキュメンタリー映画「地球温暖化詐欺」

—DVD 最終版脚本より—

The Great Global Warming Swindle
--Final Script DVD Version--

2007年

Written & Directed by
MARTIN DURKIN

Wag TV

(翻訳 : 増尾誠)

「地球温暖化詐欺」に登場する主な科学者たち



ティム・ボール教授 ウイニペック大学 気候学



ニール・シャヴィブ教授 エルサレム大学 物理学



ブレイバーのローソン卿 元英國財務大臣（2005年上院調査委員会の中心メンバー）



イアン・クラーク教授 オタワ大学 地球科学



ピアース・コービン博士 太陽物理学者 ウエザー・アクションの気象予報士



ジョン・クリスティ教授 アラバマ大学 大気科学 IPCC の主執筆者



フィリップ・ストット教授 ロンドン大学 生物地理学



ポール・ライター教授 パリのパスター研究所 IPCC



リチャード・リンゼン教授 マサチューセッツ工科大学 気候学
IPCC



パトリック・ムーア グリーンピース共同設立者



パトリック・マイケルズ教授 バージニア大学 環境科学



ロイ・スペンサー博士 NASA 気象衛星チームリーダー

編



ナイジェル・コールダー ニューサイエンティスト誌の元
集長



ジェームス・シックワティ エコノミスト、作家



赤祖父 俊一教授 ア拉斯カの国際北極研究所（IARC）
所長



フレデリック・シンガー教授 US ナショナル・ウェザー・
サービスの元所長



フリースクリステンセン教授 デンマーク国立宇宙センター所
長



ポール・ドリーズン 作家 元環境活動家

目 次

プロローグ

あらすじ

1. 英国上院の人為説の科学的根拠の調査委員会の設置
2. 中世の気候変動は現代より大きかった
3. 近年の気温変動は工業発展(CO₂ 増) の傾向と一致しない
4. 温室効果ガスの主役は水蒸気
5. 温室効果ガスによる温暖化を気候モデルでシミュレーション
6. 気候モデルは大気温度測定値と合わず、温室効果ガス原因説を否定
7. 氷床コアの調査；気温変動が先行、CO₂ が後追い
8. なぜ気温上昇すると CO₂ 増えるか
9. 太陽黒点の観察と天気予報
10. 太陽活動と気温が密接に相関している
11. 太陽活動の影響の仕方
12. 北極の気温変化は太陽活動とは一致、CO₂ とは不一致
13. どのようにして人為的温暖化説が広まつたか
14. 政治化はマーガレット・サッチャーから始まった
15. 環境保護主義者との合流
16. 政府助成金の爆発的な増大
17. コンピュータによる気候予測
18. メディアが恐怖を増大
19. 氷の融解の報道
20. 海の変化の報道
21. マラリアの北上の話
22. IPCC 報告書の信頼性—論文検閲・削除のウォールストリート・ジャーナル上
　　の告発
23. 国連の地球温暖化会議とこれを取巻く推進勢力
24. 活動グループからの勧誘や排斥
25. 環境保護運動の躍進と弊害
26. 予防原則というまやかし
27. アフリカの発展に必要な電気が導入できない
28. 太陽・風力発電は高価で、工業化に役立たない
29. 環境保護活動はアフリカンドリームを葬った

エピローグ

プロローグ



THE ICE IS MELTING

氷が解けている



THE SEA IS RISING

海面が上がっている



HURRICANES
ARE BLOWING

暴風が吹き荒れている



AND IT'S ALL
YOUR FAULT

みんなあなたのせいです



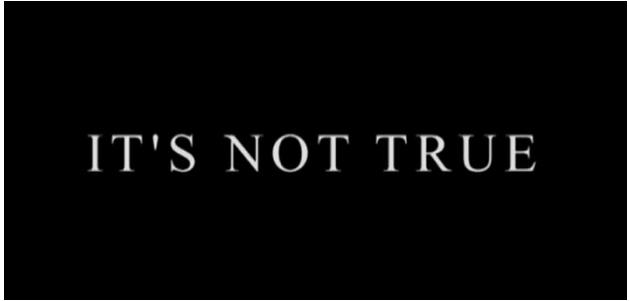
SCARED?

恐ろしい？



DON'T BE

ダメだ



IT'S NOT TRUE

これは嘘です



「地球温暖化の警鐘は科学を装っていますが、本当は科学ではなく、プロパガンダです。」（ポール・ライター教授 パリのパスター研究所）



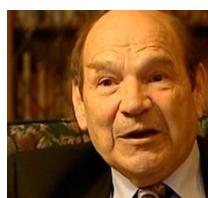
「20世紀の地球温暖化と人類史以来の温室効果ガスを関連付ける直接の証拠はありません。」（ニール・シャヴィブ教授 エルサレム大学 物理学）



「みんな嘘を聞かされているだけなのです。すべてが嘘から始まっているのです。」（ナイジェル・コールダー ニューサイエンティスト誌 の元編集長）



「CO₂が将来の気候を左右するとは云えませんし、過去にも一度もありませんでした。」（イアン・クラーク教授 オタワ大学 地球科学）



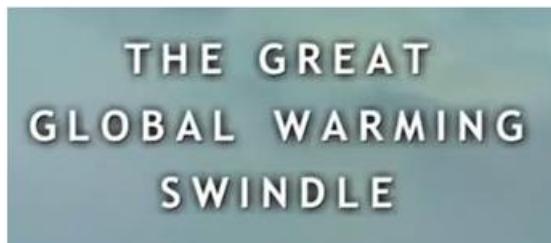
「もし大気中のCO₂が温室効果ガス（greenhouse gas）として増大するならば、気温は上がるでしょう。でも、氷床コアの記録は全く反対なのです。ですから人間活動によって気候変化が起きているという基本的な仮説が全部間違っていることがわかります。」（ティム・ボール教授 ウィニペック大学 気候学）

人為的地球温暖化 (man-made global warming) は単に気候の理論にとどまらず…我々の時代の典型的な倫理と政治運動の一つでもあります。

運動家はもう議論する時は終わったと言い、批判に対してはどんなに科学的に厳密であろうと誤りであり、とても危険だとも言っています。

しかしこの映画には、現在の気温に何の異常もみられなく、地球の気候は絶えず変化していること、さらに二酸化炭素（炭酸ガス、CO₂）が、人為的であるなしにかかわらず、地球の気候を左右しているという見解を支持する科学的な証拠は確認されていないことが示されています。

人為的気候変動は疑う余地がなく証明されていると、いたるところで聞かされていますが…しかしあなたは嘘をつかれているのです。



映画「地球温暖化詐欺」

あらすじ



「人々が地球温暖化を信じないと云うとき、私はあえて信じると云います。ただ、私は人為的に発生した CO₂が温暖化の原因だということは信じていません。」



「数年前までは、私も CO₂だとおもっていました。なぜかと言えば、一般大衆と同様にマスコミの云うことばかりを聞いていましたからです。」

空想的でまるでこの世の終わりの宣告のようなニュース報道が日々増えています。

しかし、多くの上級気象科学者はこの理論はナンセンスだと云っています。



「例えば、地球の歴史を見れば、CO₂が現代よりも 3 倍も多かった時代、あるいは現代より 10 倍も多かった時代がありました。もし、CO₂が気候に大きく影響するのでしたら、復元された古気温から分かるはずです。」



「地質学的時代区分から気候を調べても、CO₂が主要な気候変動要因であったと疑うことは決してできないでしょう。」



「過去数千年の主要な気候変動を見ても、CO₂で説明できるものは一つもありません。」（ピアース・コービン博士 太陽物理学者 ウエザー・アクションの気象予報士）



「CO₂が将来の気候を左右するとは云えませんし、過去にも一度もありませんでした。」（イアン・クラーク教授 オタワ大学 地球科学）



「私は、地球温暖化論争で、人間が気候システムに破滅的な変化をもたらしているということで数千人の科学者の意見が一致しているとたびたび聞きました。でも。これが真実でないと率直に思っている人は大勢いますし、私もその一人です。」（ジョン・クリスティ教授 アラバマ大学 大気科学 IPCC の主執筆者）

人為的地球温暖化説は通常の科学的論理ではありません。これは、国連の“気候変動の政府間パネル（IPCC: Intergovernmental Panel on Climate Change）”という強力な政治団体により支援されています。



「この IPCC は、その他の国連の団体と同様に政治的なものです。最終結論は政治的に導かれます。」
(フィリップ・ストット教授 ロンドン大学 生物地理学)



「IPCC は世界トップの 1500 から 2500 人の科学者を擁していると自称していますが、これらの人々の履歴を見れば、これは明らかに真実ではありません。科学者でない人が大勢おります。」



「人数を 2500 人にまで増やすために、彼らは、論文査閲者や政府の役人など、接触のあった人は誰でも取り込み始めなければなりませんでした。でも、誰も同意は求められていません。ほとんどの人は不同意なのです。」（リチャード・リンゼン教授 マサチューセッツ工科



「論争に同意せずに退会した人がたくさんいたことを知っていますが、この人たちは執筆者リストに載ったままで、世界のトップ科学者 2500 人の一員のままになっています。」

この映画は、気候の論理がいかにして政治イデオロギーになったかという物語です。

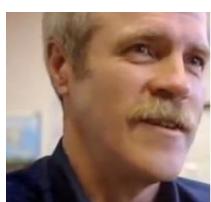


「私はそれをもはや環境活動と呼びたくありません。なぜなら、それは政治活動家の運動であり、世界全体に巨大な影響を与えているからです。」（パトリック・ムーア グリンピース共同設立者）

この映画は科学の全領域が歪曲されているという物語です。



「気象学者は資金を獲得するために問題を必要としています。」
(ロイ・スペンサー博士 NASA 気象衛星チームリーダー)



「私たちはパニックを創造することに既得権益を持っています。なぜなら、それにより気候科学にお金が流れ込んでくるからです。」



「云ってはいけないことが一つあります。それは、これは解決の必要な問題にはならないでしょうということです。」

この映画は、政治キャンペーンがいかにして官僚主流の運動に変身していったかという話です。



「事の真相は、今現在まさに何万という数の職が地球温暖化に依存しているということです。
それはビッグビジネスです。」（パトリック・マイケルズ教授 バージニア大学 環境科学）



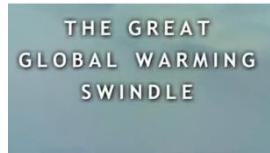
「それ自身巨大な産業になっています。もし、地球温暖化の寄せ集まりがすべて崩壊したら、失業して職探しが必要な人の数は恐ろしく大きなものになるでしょう。」

この映画は、検閲と脅迫の話でもあります。



「私は、口角泡を飛ばして不同意の人をののしるのを見聞きしていますが、科学的なやり方ではありません。

気候科学はとても信じられないほどの“怒り”の科学になっていますが、私はその怒りは実際には弱さのサインだとみています。」



1. 英国上院の人為説の科学的根拠調査委員会の設置

英国議会の上院は、2005年に、人為的地球温暖化の科学的根拠を調べるために調査委員会 (House of Lords enquiry) を設立しました。

この調査委員会を主導したのは1980年代に財務大臣を務めたブレイバーのローソン卿で、地球温暖化の研究に政府資金を拠出した最初の政治家です。



「私たちは、この分野の専門家や沢山の人から証拠を集めて、本当に、本当に完璧な調査を行って報告書を作りました。

私が驚いたのは、科学がいかに弱く、不確かなものであったかということでした。

実際には深く考えを巡らせている人がとても沢山おりますが、中には公の場に出るのを少し恐れている人もおります。しかし、この人らも静かに、プライベートに、あるいは中には公然と、“ちょっと待てよ、これはどうも合点がいかないよ”と云っています。」（ブレイバーのローソン卿 元英国財務大臣）

2. 中世の気候変動は現代より大きかった

私たちは、地球の気候が変化してきているので心配しなければならないと聞かされていますが、地球の気候は常に変化しているのです。

地球の長い歴史には、今日よりもっと暖かったり、もっと寒かった時代が数えきれないほど沢山ありました。気候は常に変化しています。我々人間の助けなしに変わっています。

現在の温暖化傾向は、少なくとも 200 年前の、地球の歴史の非常に寒冷な時代の終わりまでさかのぼることができます。この寒冷な時期は気候学者には小氷期(little ice age)として知られています。

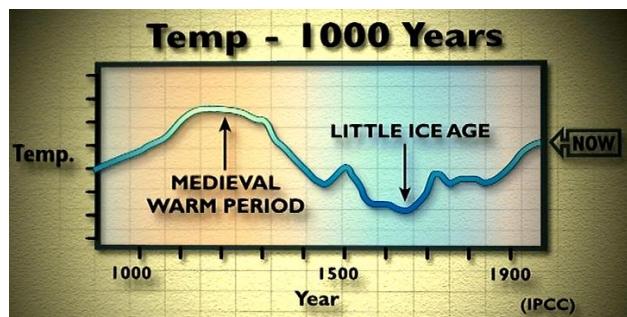


「14 世紀にヨーロッパは小氷期に突入しました。この証拠は昔の父なるテムズ川の古いイラストや版画に求めることができます。この小氷期の最も厳しく強い冬にはテムズ川は全面凍結したからです。」



「そして、人々はテムズ川でスケートをしたり、お店を出したりして楽しい氷上祭りをしていました。」

さらに小氷期より前の時代にまでさかのぼると、現代よりも気温が高かった温和な繁栄の時代があります。気候学者には中世の温暖期として知られています。



「気候が、中世の時代のライフスタイルを、全く違うものにしていたということを知ることは重要です。」

今日では、温暖化は、この世の終わりをもたらすものという見方をしています。実際には、この温暖な時代を描写しようと必ず“豊穣”につながるように見えます。」

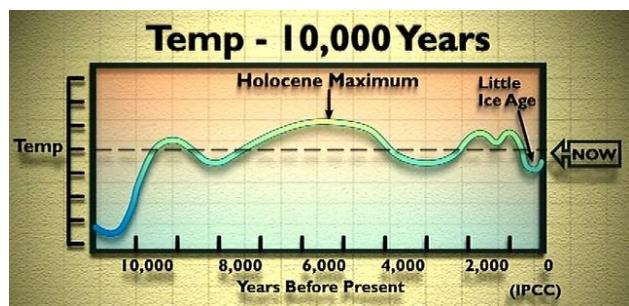
ヨーロッパでは教会建築の盛んな時代でした。チョーサー(1340—1400 年 詩人)によれば、この時期は、英国の北部においてさえブドウの栽培が盛大に行われていました。



「ロンドンの街のいたるところに中世の温暖期に栄えたブドウ園の小さな痕跡が残っています・・・ですから、この中世は素晴らしい富の時代だったのです。この小さな教会も、ある意味でそのことを象徴しています。なぜなら、偉大な繁栄の時代から生まれたからです。」



中世の温暖期より以前にさかのぼると、さらに暖かい時期があります。青銅器時代あるいは石器時代を含むとても長い時代です。地質学者には“完新世の気候最温暖期 (Holocene Maximum)”として知られています。この時代は、気温が現在よりもずっと高く、3千年以上続きました。



「新完世の時代を 8000 年さかのぼると、今の間氷期に当たり、現在よりもとても暖かったのです。

ところで、北極熊はこの時代を明らかに生き延びて、今日われわれと共に存しております。北極熊はとても適応能力が高く、これらの過去の温暖期一ヒプシサーマル (hypsithermals) と呼ばれている一も、彼らには何も問題を起こしません。」

3. 近年の気温変動は工業発展(CO₂ 増) の傾向と一致しない

過去の気候の変動は明らかに自然でした。では、なぜ今日では違っていると考えるのでしょうか？

地球温暖化の現代の警鐘では、犯人は工業社会です。

近代産業のおかげで、かつては金持ちだけが独占していた贅沢品も、今では庶民も豊富に利用できます。

新規技術は生活を一層楽しく、一層充実したものに変えました。近代的な輸送機関や情報伝達は、世界の距離を縮めてより同質化させてきました。産業の発展は我々の生活を変えました。しかし、気候もまた変えたのでしょうか？

人為的地球温暖化説によれば、工業の発展が気温の上昇をもたらしているに相違ないと云っています。でもこれは本当でしょうか？



「20世紀の温暖化の大部分が炭酸ガス (CO_2) によって引き起こされていると言ふらしている人がいますが、基礎的数字を見ていません。」

20世紀の初めは、いまだ世界中どこも産業化以前の段階でした。車を持つ人も少なく、電気さえ普及していませんでした。

産業はまだかなり原始的で、しかも少数の国に限られており、経済不況で麻痺したりしていました。

しかしながら、第二次大戦後は一変しました。

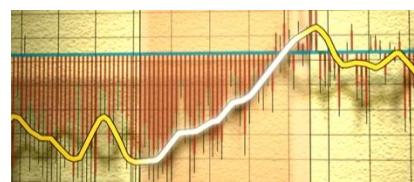
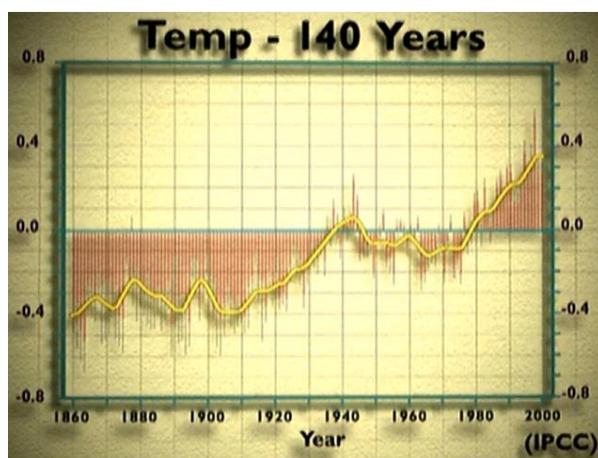
冷蔵庫、洗濯機、テレビ、車といった消費財が大量生産されて国際市場に入るようになってきました。歴史家はこれを産業活動の爆発あるいは戦後のエコノミックブームと呼んでいます。



この現象を気温の記録と比較するとどうなるでしょうか？

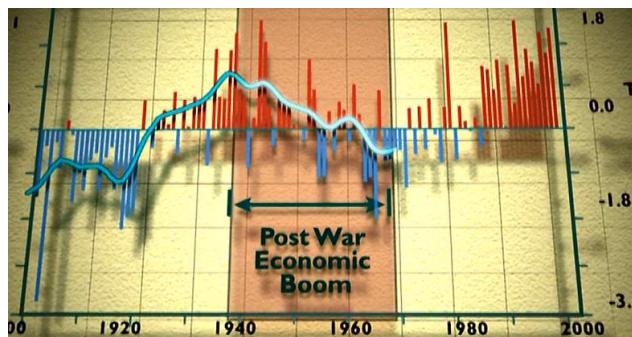
これは IPCC の使っている 20世紀の世界の気温の記録です。

過去 150 年間で温度の上昇はちょうど 0.5°C を超えました。しかし、おかしなことに、ほとんどの上昇は 20世紀の初めの数十年、即ち 1905 年から 1940 年の間に起きています。



この時期の工業生産はまだ比較的に低かったのです。1940年以後は、産業は拡大しましたが、どういうわけか世界は冷えました。

この冷却の様子はほかの気温の記録ではもっと明白です。このグラフは20世紀の北極の気温の変化を示しています。ここでも再びほとんどの上昇が1940年以前に起っています。



そして、再び、戦後のエコノミックブームの期間は気温が下がり、そして35年間下がり続けます。



「CO₂は1940年頃に指数関数的に増大し始めたが、気温は1940年には実際に低下し始め、1975年まで続きます。ですから、これでは関係が逆になっているのです。」（赤祖父俊一教授

アラスカの国際北極圏研究所（IARC）所長）

「CO₂が急激に上昇している一方、気温が低下しているとき、私達はCO₂と気温が連動していると云うことは出来ません。」



「気温は、1940年までの人為的なCO₂の発生が少ないときに著しく上昇しましたが、戦後の世界の産業と経済全般が進展し始めて人為的CO₂発生が急増し始めると、地球の気温は下がっていました。言い換えれば、事実は理論と一致しませんでした。」



「ちょうど第二次大戦の後で産業ブームが起きたとき、二酸化炭素が増大しているのに、それでも地球はどんどん冷え続け、氷河時代が来るという恐怖を引き起こしました。まったく馬鹿げていましたが、いまだにナンセンスのままです。」

4. 温室効果ガスの主役は水蒸気

なぜ、二酸化炭素が、私達の気候変動の原因だと考えられるのでしょうか？

CO₂ガスは地球の大気の非常に微小な一部にしかすぎません。実際、私たちは大気中のCO₂の含有量の変化を測定するのに10ppm（ピーピーエム、100万分の一の量単位、10ppmは0.0010%）の水準で行っています。



「CO₂ガス量を、大気中に存在する酸素（20.95%）、窒素（78.08%）、アルゴン（0.93%）など全ガスにたいする百分率で表すと 0.054%になります。

これは信じられないほどの小さな割合です。

もちろん、今関心の的である人間が発生させたであろうという部分の割合はさらに少なくなります。」

温室効果の影響は、地球の気候システムの中の一部を占めるにすぎません。また、CO₂は比較的マイナーな温室効果ガスです。



「大気はいく種類ものガスからできています。温室効果ガスと呼んでいるものはそのうちの小さな割合にすぎません。しかも、その非常に小さな割合の温室効果ガスのうち 95%が水蒸気で占められています。水蒸気が最も重要な温室効果ガスなのです。」



「水蒸気は温室効果ガスです。断然もっとも重要な温室効果ガスです。」

5. 温室効果ガスによる温暖化を気候モデルでシミュレーション

CO₂は、温室効果ガスとしては、単に2次のものであるだけでなく、どの種類の温室効果ガスであろうと、気候変動の原因になっていることは全く明らかになっておりません。

これを解決するには、空を見上げて、対流圏（troposphere）を見なければなりません。



「もしそれが温室効果の温暖化であるならば、対流圏の真ん中、即ち大気層の 10, 12 km の上空では、地表よりもより温暖になります。温室効果がどのような作用をするかについては、きちんとした理論的な裏付けがあります。」

温室効果の過程は次のようにになります。太陽が熱を地球に送り込みます。

もし、温室効果ガスが無かつたら、太陽放射（solar radiation）は宇宙に跳ね返り、この惑星は冷たいままで人は住めません。この逃げていく熱は、地上数マイルにある地球の対流圏で温室効果ガスにより捕捉されます。



気候モデル（コンピュータを使ったシミュレーションのこと）によれば、もし温暖化を起こしているのが温室効果ガスならば、ここで温暖化速度が最大になります。



「全てのモデルの計算では、どれもこれも、温暖化は地表から大気中を上昇するや否や即時に起こり…そして実際赤道上での最大の温暖化は上空約 10 kmで起こります。」（フレデリック・シンガー教授 US ナショナル・ウェザー・サービスの元所長）

6. 気候モデルは大気温度測定値と合わず、温室効果ガス原因説を否定

ジョン・クリスティ教授は地球の大気の温度測定に対してとても大きな責任を負っています。1991年にクリスティ教授はNASAから特別科学功績メダルを授与され、1996年には米国気象学会から気候モニター能力の基礎的な発展に対し特別賞が与えられました。彼はまた国連の“気候変動の政府間パネル IPCC”の主執筆者でもあります。

クリスティ教授などの科学者が用いている地球大気の気温測定法は二つあります。衛星を使う方法及び気象バルーンを使う方法の二つです。





「一貫して見出してきたことは、地球上の広い範囲で、大気の巨大な層には地表で見られるほどの温暖化が観察されないということです。これは、理論が単純明快であるだけに頭を悩ませることなのです。」

「この理論によれば、もし地表が温まれば、上空の大気は迅速に温まらなければならぬのです。でもこの部分の大気層の温度上昇は全く劇的ではありません。だから気候モデルがここで表している論理と一致しないのです。」



「気候モデルを悩ませる問題の一つが、北極以外の場所では、大気層を上方に行くにしたがって温暖化速度は増加すると予測していることです。」

しかし、まったく明らかになったことは、二組のデータ、すなわち誰もが話題にする衛星データのみならず、気象バルーンのいずれにもそのような傾向が見られないことです。実際には、地表の温度が上空の大気の温度より少し暖かくなっているように見えます。全く食い違っているのです。」



「このデータは、あなたが思っている温暖化は、多分温室効果ガスのせいではないという事実を知る手掛かりを与えてくれています。」



「高度が上っても気温は高くならないということが観測されています。事実、多くの観測では高度が上るにつれて温暖化の速度は少し低下しています。」

ですから、人為的地球温暖化の仮説は捏造されたものであると、証拠に基づいてある程度まで言えるでしょう。」

最近の地球の温暖化は、起こる場所でない所でおき、起こる時期でない所で発生しました。

もし、CO₂が気候変動をもたらしているなら、戦後の経済成長の時期には気温が上らなければいけませんし、また対流圏の大気の温暖化速度は地上より大きくならなければいけません。

でも、全く反対のことが起きているのです。

7. 氷床コアの調査；気温変動が先行、CO₂ が後追い

では、過去の長い地球の気候変動の歴史の中で、二酸化炭素がかつて気温変化をもたらしたという何らかの証拠はあるのでしょうか？

昔の時代を調べる方法の一つに、氷床をドリルで深く掘り下げるやり方があります。



これにより科学者達は、CO₂と地球の気温変化の間に相関があることを見出しました。

この氷床コアは、しばしば人為的地球温暖化説を支持するために引用されてきました。

しかしながら、この氷床コアのデータには、これまでほとんど語られることのないことが隠されています。

イアン・クラーク教授は北極の古気候学の第一人者です、
数十万年前の地球の気温の記録を調べています。

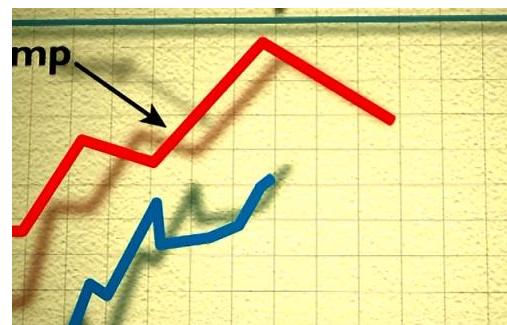


「私達は、長期間尺度で気候を調べるときは、実際に気候の記録を保存している地質学的物質を探します。もし、氷のサンプルを例にとれば、気温の復元には同位元素を使って行いますが、CO₂の含有量は氷に閉じ込められた大気を集めて分析することで調べます。」

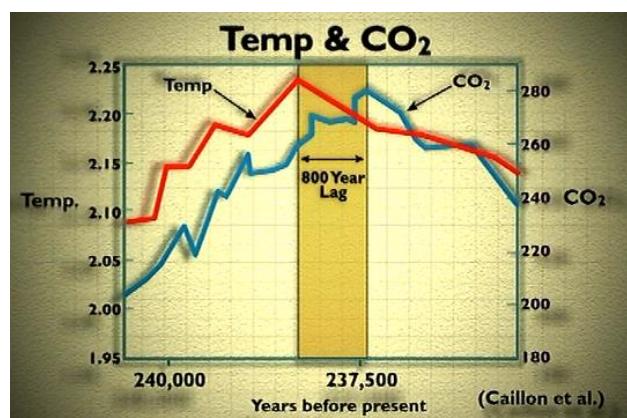
クラーク教授等は、実際に二酸化炭素と気温が相関していることを見出しました。しかし、この繋がりの関係は全く正反対なのです。



「これが南極ポストークの氷床記録です。



赤線が気温で、氷河期を過ぎた後は一定の間隔で年代を追って上昇していきますが、気温が上昇してから、その後でCO₂が昇って行くのが分かります。



CO₂は気温の増大より遅れています。この遅れは800年あります。ですから、気温はCO₂よりも800年先行して始まっているのです。」



「ですから、二酸化炭素は温暖化の原因ではないのです。実際は、温暖化が二酸化炭素の増大を作り出しているのです。」



「CO₂が温度変化を引き起こしているとは言えないことは明らかです。CO₂は温度が作り出したもので、温度変化にしたがって変化していきます。」



「この氷床コアの記録はいま議論している問題の核心を突いています。

人々は、大気中の CO₂が、温室効果ガスとして大気中に増えると、その結果気温が上がると云っています。しかしながら、氷床コアの記録はそれが正確に反対であることを示しています。

ですから、気候変動が人間活動のせいだという人為説は、基礎の仮説、最も基礎となる仮説が間違っていたということが示されたのです。」

8. なぜ気温上昇すると CO₂ 増えるか

では、気温が上がると大気中の CO₂が増えるのはどうしてそうなるのでしょうか？答えは海洋の中にあります。



海洋は莫大な量の二酸化炭素を含有しており、毎年人間が作り出す量よりはるかに大量を大気中に放出しています。また、海洋は大量の CO₂を大気から吸収もしています。

どれほど大量に放出し、どれほど大量に吸収するかは温度によります。



「学校の子供でも、海洋と大気の間で二酸化炭素の交換が行われていることは、地理の教科書から知っています。海洋が温まると二酸化炭素を大気中に放出しますし、海洋が冷たくなれば二酸化炭素を取り込み貯蔵します。」

しかし、なぜ温度変化と、海から出たり入ったりする二酸化炭素量の間に数百年もの時差が生じるのでしょうか？

この理由は、海洋があまりにも広くあまりにも深いために、温まったり冷めたりするのに文字通り数世紀かかるからです。



「海洋はとても広く、地球の表面の大部分を占めています。この広さのために温まったり冷めたりするのにとても長時間を要するのです。しばしば数百年もかかります。」

9. 太陽黒点の観察と天気予報

二酸化炭素が気候変動をもたらしているという通説は、使える科学的データのほとんどのものと争っています。気象バルーンや気象衛星のデータ、あるいは氷床コアあるいは歴史上の気温の記録のデータなどです。

しかし、CO₂でないとしたら、何が気候変動をもたらしているのでしょうか？



「車にガソリンを入れたり、電灯の明かりをつけながら、気候を制御しているのは我々なのだと考えるのは奇妙ではありませんか。

空を見てください、あの巨大な物質、そうです太陽です。現在の 65 億人の人類さえ、これに比べれば取るに足らないような小さなものです。」

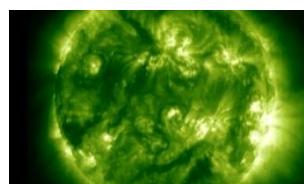
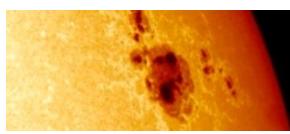


1980 年代の終わりに、太陽物理学者のピアース・コービンはとても急進的な方法で天気予報をすることを決めました。気象庁は膨大なデータを保持しているにもかかわらず、コービンの新しい方法の方が常に正確でした。彼は英国の新聞で、天気予報の超人ともてはやされました。彼の成功の秘密は太陽でした。



「私達の太陽 - 天気長期予報技術の起源は、太陽黒点の研究と予測をしたいという熱意から生まれたのですが、そこで天気の予報に太陽を利用する事が現実にはもっともっと面白いことに気がきました。」

太陽黒点は、現在では、太陽活動が活発なときに現れる強力な磁場だということが知られています。



しかしながら、これが正しく理解される以前の何百年間の間も、世界中の天文学者は、黒点の増加は温暖な天候を告げると信じて太陽黒点の数を数え続けていました。

1893 年に英国の天文学者エドワード・マウンダーは、小氷河期のあいだ太陽黒点がほとんど消えてしまっていることを見つけました。こ



の太陽活動が不活発な時期はマウンダー極小期 (Maunder Minimum) として知られています。

しかし、黒点は、天気予報の指標としてどれだけ信頼できるのでしょうか。



「私は、気象庁のいわゆる普通の予報に対抗してウイリアムヒル（ギャンブル企業）を通して賭けをしてテストすることにしました。私は毎月毎月勝ち続けました。

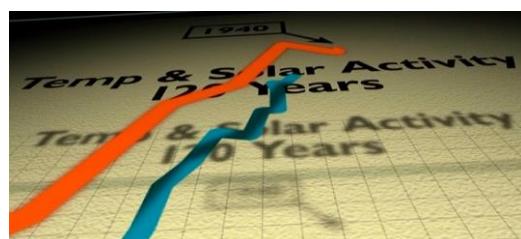
去年の冬は、気象庁は非常に寒くなるだろうと云いました。私達は違う、そんなことは全くなくほとんど平年に近いでしょう。ただ、寒くなるとしたらクリスマス後か2月でしょうと云いました。私達が正しく、気象庁は間違っていました。」

10. 太陽活動と気温が密接に相関している

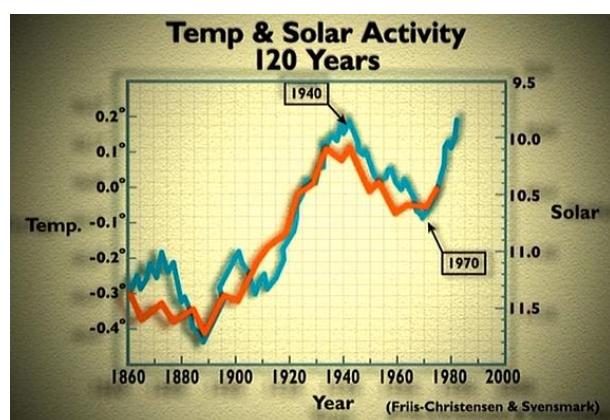
1991年にデンマークの気象協会の主任研究者らが20世紀の黒点記録を集大成して気温の記録と比較することにしました。



彼らは、太陽の状況と地球の気温のあいだに信じられないほどの密接な相関があることを見出しました。



太陽活動は1940年頃にかけて急激に上がり、その後1970年代までは低下しますが、さらにその後は再び上がり始めます。



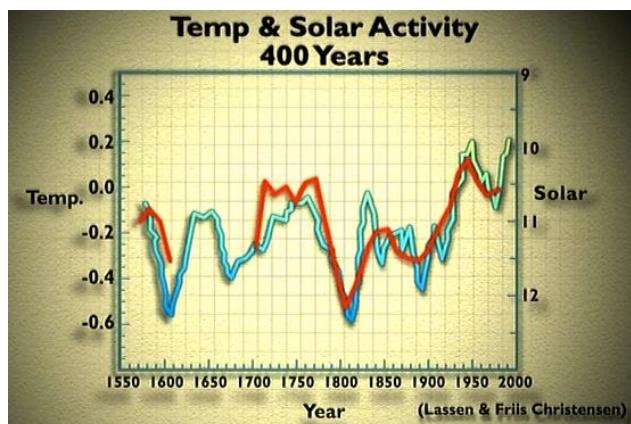


「この温度と太陽活動あるいは太陽黒点数サイクル長さの相関を見たとき、人々は単に偶然の一一致にすぎないかも知れないと云いました。

では、どうしたらこれが単なる偶然でないことを証明できるでしょうか？

明らかなのは、もっと長期間あるいは別の時期のものがあればよいということです。そこで私たちはもっと時代をさかのぼりました。」（フリス・クリステンセン教授 デンマーク国立宇宙センター所長）

そこでフリス・クリステンセン教授と同僚は共同で過去400年間の天体データを集め、太陽活動と気温変動の比較をしました。



再び、彼らは太陽活動の変動が地球の気温変化と密接につながっていることを見出しました。気候に変化をもたらしているもの、それは太陽でした。

二酸化炭素やその他のものではまったくなかったように見えます。

11. 太陽活動の影響の仕方

太陽は、熱を送ってくことで地球に直接的に影響を与えます。しかし、さらに太陽は、雲の形成をコントロールすることで間接的に影響を与えることが科学者たちによって確定されています。



実際、地球への太陽の影響の仕方はあまりに多くあるので、太陽活動の変動が地球の気候変化とこれほど密接に相關していることも多分驚くにあたりません。



「もしあなたがX線で見ることのできる目を持っていれば、素敵で優しい黄色の球体が実は荒れ狂う虎のように見えるでし



よう。太陽は信じられないほど狂暴な野獸なのです。

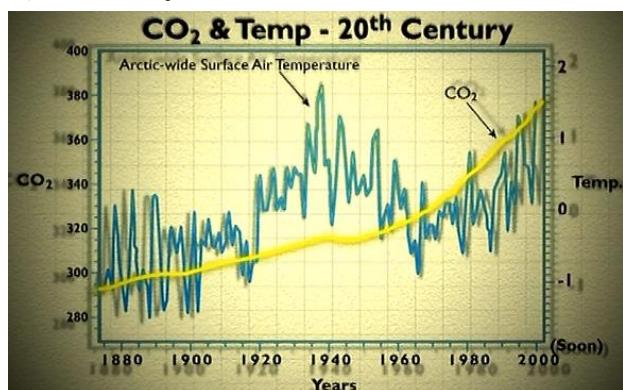
時々大量のガスの噴出を起こしたり、絶えることない太陽風を吹き出し続けており、これらが地球を永久に突き抜けていっています。

私達は、ある意味で太陽の大気の中にあると云えます。この太陽の磁場の強さが、20世紀では二倍も強くなっています。」

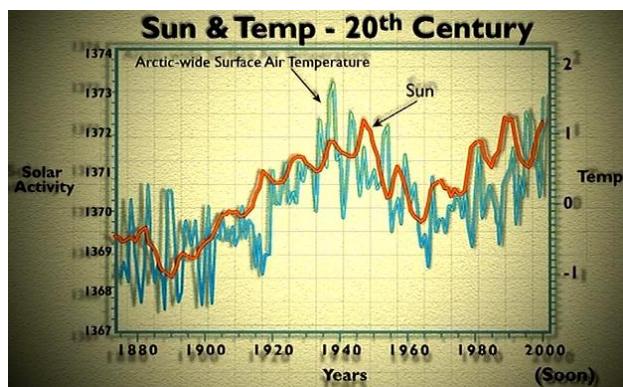


12. 北極の気温変化は太陽活動とは一致、CO₂とは不一致

2005年にハーバード大学の天体物理学者達は、米国地球物理学連合(AGU)の公式雑誌に次のグラフを発表しました。



青色の線は北極の過去100年の気温変化を示しています。そして、これ（黄色の線）がこの同じ時期の二酸化炭素の上昇です。この二つは明らかに一致していません。



しかし、もう一度グラフを見てください。この赤線は前世紀（20世紀）の太陽活動の変動を描いたものです。

このデータはNASAと米国海洋大気庁(NOAA)の科学者によりそれぞれ独立に作られたものです。



「太陽活動は、過去 100 年以上、いや過去数百年以上にわたり、海氷温度および気温との間で 10 年ベースで大変良い相関があります。」

多くの科学者にとって、次の結論は避けられません。



「太陽が気候変化をもたらしているのです。
CO₂は無関係です。」

13. どのようにして人為的温暖化説が広まったか

しかしながら、もしその通りだとしたら、私たちは、なぜ毎日毎日人為的地球温暖化の記事で攻め立てられているのでしょうか？

なぜ、これほど多くの報道関係者やその他の人々が、それが明白な事実だとみなしているのでしょうか？

地球温暖化説の威力を理解してもらうためには、それがいかにして起きてきたかについてお話ししなければなりません。

気候に関する破滅的な予測は新しいことではありません。1974 年に BBC は凶暴な嵐や旱魃は大異変の迫っている証しかもしれないという警告を放送しました。

そして、この気候災害の原因はなんだと考えられたのでしょうか？



ニューサイエンティスト誌の元編集長ナイジェル・コールダーはこのとき番組の裏方にいました。



「ウェザーマシンの番組で、私たちは当時の主流の意見、即ち地球寒冷化と新氷河期の脅威を報道していました。」

「大自然の氷は人間を矮小化しそして・・・」

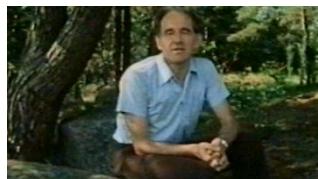
「気温が数十年下がり続ければ、寒冷化した世界は破滅的な結末を迎えるだろうと専門家は警告しています・・・」



かつては大凍結の脅しがありました。また新たな氷河期が、我々の土地を奪い、北方の都市を埋没するのでしょうか？

しかし、この呪われた運命の陰に一つの希望の声が出てきました。スウェーデンの科学者バート・ボーリンが、人為的二酸化炭素が世界を温めるのに役立つかもしれないという試みの提案をしました。

彼自身も自信なかったのですが。



「たくさんの石油と膨大な石炭が残っています。しかし、これまでのような増大し続ける速度で燃やし続ければ、50年もすれば気候は今より数度暖かくなるかもしれません、よく分かりません」



「私たちが、最初にスウェーデンのバート・ボーリンを二酸化炭素の危険性についての国際的なテレビ討論会に出席させました。私は、専門家のトップから彼を空想の世界にふけらせすぎたと厳しく批判されたことを覚えております。」

1970年代の寒冷化の恐怖が頂点にあったころ、バート・ボーリンの一風変わった人為的地球温暖化説は馬鹿げたものに見えました。しかし、二つのことがこれを変えました。

第一は、気温が上がりだしたことです。

第二は、英国で炭鉱ストライキが起きたことです。

14. 政治化はマーガレット・サッチャーから始まった

マーガレット・サッチャー首相（在任1979–1990年）にとっては、エネルギーは政治問題でした。1970年代の初めは石油危機で世界は不況に陥りました。

英国では荒れ狂う炭鉱ストライキが停電を引き起こし、保守政権の転落をもたらしました。



サッチャーは、彼女のところではこれと同じことが起きないようにしようと決心しました。

た。



「この国に見られるのは組織化された革命的少数派の出現です。彼らの真の狙いは法や秩序を破り、民主的議会政府を破壊することなのです。」



「この課題は、マーガレット・サッチャーにより政治化されました。」



「私がエネルギー省の大臣の時ですが、マーガレット・サッチャーは常に原子力発電を推進しようとしていたことをよく覚えております。気候変動問題が現れるずっと前から、彼女はエネルギー保障を心配しておりました。彼女は中東を信用しておりませんでしたし、また英國の炭鉱労働者組合も信用しておりませんでした。石油も信用できず、石炭も信用できないことから、彼女は、実際に原子力発電で進まざるを得ないと感じていたのです。そして、気候変動、地球温暖化ということが出てきたとき、彼女はこれは大変好都合だと感じました。」

二酸化炭素を排出しないことも一つの論拠になりますし、またなぜ原子力を求めなければならないかの論拠にもなると思ったのです。これは、彼女が実際に大いに話していたことです。

それ以来、誤って伝えられているのです。」



「そして、マーガレット・サッチャーは、王立協会 (royal society) 行って科学者たちに、“お金は用意できているからこの話を証明してください”と云いました。もちろん科学者たちはすぐに出かけて実行しました。」



「政治家が何かに肩入れしたり、名前を出したりすれば、もちろん何らかの形でお金が流れることになるのは必然で、その通りになっています。そして、必然的に研究、開発、あるいは協会設立の乱立がはじまりました。」

二酸化炭素と温度の関係を強調して気候調査を行うとさえ云うことができればよいのです。」

1988 年にミセス・サッチャーの要請で、英国気象庁は気候モデリング・ユニットを設立しました。これが新しい国際委員会、即ち “気候変動に関する政府間パネル (IPCC/the Inter-Governmental Panel on Climate Change)” の基礎になりました。



「彼らは、地球温暖化による気象災害を予告する最初の分厚い報告書を出しました。私は、科学記者会見に行って驚いたことが二つあります。

一つはメッセージの単純さ、雄弁さ、および話の元気さです。

二つ目は、つい数か月前まで王立協会の主要な会議の議題であった太陽の役割も含めて、これまでの気候科学を完全に無視していることです。」

15. 環境保護主義者との合流

しかしながら、環境問題として、人為的二酸化炭素を新たに強調することが気に入ったのは、ミセス・サッチャーだけではありませんでした。



「それは確かに、私が中世の環境主義と呼んでいる環境の考え方にとっては大変好ましいものでした。車も機械もすべて捨てて中世の時代様式に戻ろうというものです。」



ええ、彼らはそれが気に入りました。なぜなら、二酸化炭素は工業化の象徴だからです。」



「二酸化炭素は工業ガスであり、たぶん、ええ、経済成長と結びついており、ええ、輸送機関や自動車とも、そしていわゆる文明と呼ばれるものと結びついています。

そして、環境運動には、経済成長を単純に悪だと考えて反対している勢力が存在します。」

パトリック・ムーアは、彼の時代のトップの環境運動家の一人とみなされています。彼はグリーンピースの共同設立者です。



「焦点が気候に移ったのには明らかな二つの理由がありました。

第一は、80年代半ばまでは、合理的なものすべてが大多数の人々が賛成したので、環境運動では我々は皆でやらねばならないと叫んでいました。しかし、大多数の人々が賛同している今では、対決的姿勢を保ちつづけることはとても難しいのです。ですから、反体制的であり続けるにはかつてないほどの極端な姿勢を取らなければならなかつたのです。

私がグリーンピースを離れるとき、丁度、塩素を世界的に禁止しようというキャンペーンの最中でした。私は、ねえ君たちこれは（化学の）周期律表に載っている元素の一つなのだよ。これをまるまる禁止する裁判を下す権利など我々にはありはしないでしょうというようなことを云いました。

第二の理由は、環境過激主義が現れたことです。この因は、共産主義が崩壊し、ベルリンの壁が崩れ、多くの反戦運動屋や政治活動家が環境運動に入ってきたことです。



新マルクス主義を持ち込み、さらに自然環境や科学よりも反資本主義あるいは反グローバリゼイションに近い行動計画（アジェンダ）を、環境用語で巧みに覆い隠すことを覚えました。」



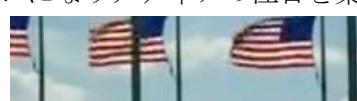
「左翼は社会主義マニフェストの失敗から少し方向を失っていましたし、共産主義もよく見るにしたがってこれに輪をかけた状態だと分かりました。ですから、彼らは昔からの反資本家のままでしたので、反資本主義を隠すための新しい装いを見つけなければならないのです。」



「そして、これは右翼のマーガレット・サッチャーから極左の反資本家環境運動家までの驚くべき同盟でした。これが狂気の考えに基づく運動勢力になりました。」

16. 政府助成金の爆発的な増大

1990年代の初めまでには、もはや人為的地球温暖化は気候理論の中での風変りなものではありませんでした。これは満開の政治キャンペーンになりメディアの注目を集めました。この結果一層の政府資金が集まりました。



「ジョージ・ブッシュ大統領（シニア、任期1989–93年）以前は、気候あるいは気候関連科学の資金は1億7000万ドルぐらいだったと思います。この分野としては妥当な範囲でした。それが、年間20億ドルにも跳ね上がったのです。10倍以上です。」

そして、はい、いっぱい変わりました。仕事が沢山増えたということです。こんなことがなかったら関係のなかった沢山の新しい人たちを、お金で買ったのです。こうして、地球温暖化の分野にしか興味のない人々の中核グループが出来たのです。」



「もし、私が調査研究をしようとすれば、サセックスのリスの話ですが、1990年以降であればどうするかといえば、私は許可申請書にこう書きます。“私は、リスの木の実の採集行動の調査を、地球温暖化の影響に特別に注目して行います。” これでお金が得られます。」

でも、もし地球温暖化を書き忘れたらお金は貰えないでしょう。」



「私たちは資金の獲得を競っています。もし、あなたの分野が注目の的であるなら、なぜあなたの分野への資金の投入が必要なのかを、合理的に説明する仕事はとても簡単です。」

17. コンピュータによる気候予測

これらの資金の大部分は、気候が将来何をもたらすかを予測するためのコンピュータ・モデルの作成に使われます。

しかし、これらのモデルはどれほど正確なのでしょうか？

ロイ・スペンサー博士は NASA のマーシャル宇宙飛行センターの気候研究の上級科学者です。NASA および米国気象学会の両方から特別科学成果賞のメダルを授与されました。



「気候モデルの信頼性は、用いられている仮定と同じぐらいしかありません。何百もの仮定が使われています。このうち一つでも間違うと予測は全く見当違いになります。」

全てのモデルが、気候変動の主原因は人為的 CO₂であり、太陽や雲ではないと仮定しています。



「私のよくする類推は、自動車がうまく走らなくなったとき、エンジン—これは太陽に相当します—を無視して、また変速機—これは水蒸気に相当します—をも無視して、右後輪の一つのナット—これが人為的 CO₂です—を調べるようなものだと云うものです。

この科学はこれほどひどいものなのです。」



「もしあなたが気候システムの理解ができていなかったり、すべての構成要素、即ち宇宙線、太陽、CO₂、水蒸気、雲、そしてこれらの集合体の理解ができていなかったり、もし一つでも欠けていたら、あなたのモデルは何の価値もありません。」

気候予測の幅は大きく変動します。これらの変動は、モデルのベースになっている仮定をほんの少し変えるだけで生じます。



「私はモデル製作者と一緒に働いていますし、私もモデルを作りますが、数理モデルでは、パラメーターを少しひねるだけでどんなモデルでも作れます。

より暖かくすることも、あるいはより寒くさせることも、変更すれば出来るのです。」

18. メディアが恐怖を増大

訓練されていない目には、コンピューター・モデルは印象的に見えます。しばしば、とっぴな気候の推測を出したり、厳格な科学の顔も見せます。

また、コンピューター・モデルはメディアに対して壮大なストーリーを途切れることなく流し続けます。



「長いジャーナリスト生活の中で私を驚かせたことは、最も初步的なジャーナリズムの原則が、この主題に関しては放棄されてしまっていることです。」



「全く新しい世代の記者や環境ジャーナリストになったのです。ところで、もしあなたが環境ジャーナリストであって、もし地球温暖化の物語が消えてしまったら、あなたも職を失います。」

「そして、報道はますますヒステリックにならざるを得なくなります。なぜなら、幸いなことにまだ経験豊富なニュース編集者が少しあり、彼らは、“ねえ君たちこれは5年前に云っていたことだよ、でもね、今はもっともっと悪くなっています、来週の火曜日までには3メートルも海面が上昇するでしょう”と云ったりするからです。彼らはますますかん高く先鋭的になるのです。」

今では、あらゆる暴風や台風をすべて地球温暖化のせいにするのが当たり前になっています。



でも科学的根拠があるのでしょうか？



「これは純粹にプロパガンダです。どんな気象学の教科書にも、天候の乱れの主な源は熱帯と極地の間の温度差によると書かれています。そして、世界が暖かくなるとこの差が小さくなると云われています。そうすると、これは嵐がより穏やかに、気温変動がより小さくなる

ことにな

り、どうしたわけか破滅的とは考えられないのです。

ですからあなたは反対のことを聞かされているのです。」

19. 氷の融解の報道

しばしば、地球の気温の穏やかな上昇であっても、極地の氷原の破滅的な融解を起こすかも知れないと云われています。

しかし、地球の気候の歴史は何を我々に教えてくれるのでしょうか？



「私たちは、グリーンランドの数千年前の気温の記録を持っています。グリーンランドはとても温暖でした。丁度千年前のグリーンランドは現在よりも暖かでしたが、劇的な氷の融解の事件は起きました。」



「たとえ永久凍土層なんかについて語るとしても、例えばロシアの森の地下に存在する氷の層、広大な永久凍土層が7-8千年前には、現在の融解の証拠をずっと上回って進んでいました。

ですから、換言すればこれは歴史パターンの繰り返しであり、氷を踏み鳴らす音が世界から消えるということにはなりません。」

赤祖父俊一教授は、アラスカの国際北極圏研究センター（International Arctic Research Centre/IARC）の所長です。IARCは世界をリードする北極圏研究所です。

赤祖父教授は、氷原は時代を越えて常に自然の膨張と収縮を繰り返していると主張しています。



「南極大陸から大きな氷塊が割れて離脱していくことが時々報道されますが、これは常に起きていることなのです。しかしながら、今では衛星があるために発見でき



るので、これがニュースになる理由なのです。」

「私は、どのテレビ番組でも、地球温暖化に関連して氷河の端から大きな氷塊が落下するのを映しているのを見ます。しかし、人々は氷が常に動いていることを忘れていました。」

このNASAの衛星のデータは、1990年代に起きた極地の海氷の大規模な自然の膨張と収縮を示しています。



ニュース報道は、北極の端から氷が破断していくさまをしおちゅう映しています。でも、これは秋の落葉と同じで、北極では普通に起きている出来事だということは報道しません。



「彼らは、“氷河の端から氷が落ちるのを見ましたか”と私に尋ねます。“はい、それは春の到来です。毎年起きています”と答えます。記者達は来ればいつも、“ところで、温室効果による災害について知りたいのですが何かありませんか”と尋ねます。私は“何もありません”と答えます。」

20. 海の変化の報道

世界各地の海面の変動を気候のせいにすることも今は当たり前になっています。



でも、これはどれほど科学的のでしょうか？



「一般に、世界中で起こる海面の変化は基本的には二つの因子で決まります。

ローカル因子と呼ばれるものは海と陸の関係ですが、これはしばしば海よりも陸の隆起と関連しています。」

「ユースタティック変化と呼ばれる海面変化は、海洋の熱膨張で起こる世界的な変動ですが、これは氷の融解とは無関係です。非常に長時間かかるので、例えばこれを調べ始めても一生かかるかもしれません。」

21. マラリアの北上の話

気温の穏やかな上昇においてさえ、マラリアのような危険な害虫で媒介される熱帯病を、北の方にまで蔓延させるとも云われています。

でも、本当でしょうか？

パリのパストール研究所のポール・ライター教授はマラリアやその他の昆虫媒介の病気の世界の第一人者の一人です。世界保健機関 WHO の専門家諮問委員会のメンバーです。米国熱帯医学会の衛生昆虫学委員会の議長でしたし、米国の気候変動の影響評価のヘルス・セクションの主執筆者でした。



「蚊は熱帯だけのものではありません。たいていの人は温帯などにいることは知っているでしょう。でも実際は、蚊は北極にも沢山います。

最もひどいマラリアの流行は 1920 年にソ連で起こりました。年間 1300 万人が罹り、60 万人ほどの死者をだしました。この恐るべき災難は北極圏にまで達しました。アークエンジェル村では 3 万人が罹り、1 万人が死亡しました。

ですから、これは熱帯病ではないのです。それにもかかわらず、地球温暖化クラブの人々は、マラリアが北上していくというアイデアを作り出したのです。」

22. IPCC 報告書の信頼性—論文検閲・削除のウォールストリート・ジャーナル上の告発

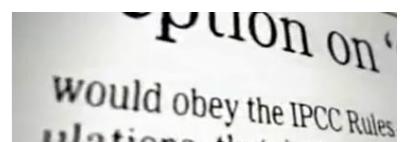
地球温暖化の政府間パネル IPCC の公式レポートには、しばしばとても激しく警鐘を鳴らしているものがあります。

でも、どのぐらい信頼できるのでしょうか？



「私は第二次と第三次の IPCC の評価報告書を見てぞっとしました。なぜなら、沢山の間違いがあって、しかもそれ確かめるつてがないのです。あるいはまた、科学文献、まつとうな科学文献、それぞれの分野の専門家の文献が付いていないのです。」

米国科学アカデミーの元会長のフレデリック・サイト教授は、ウォールストリート・ジャーナル紙への手紙で、IPCC の職員が科学者のコメントを削除・修正していたことを暴露しました。



彼は、この報告書は投稿した著者らによって是認されたバージョンではないと云いました。科学の章で、少なくとも主要な項が 15か所で削除されました。

been peer-reviewed only because it has been read, discussed, modified and approved by an international body of experts. These scientists have laid their reputations on the line. But this report is not what it appears to be—it is not the version that was approved by the contributing scientists listed on the title page. In my more than 60 years as a member of the American scientific community, including service as president of both the National Academy of Sciences and the American

これらの削除された箇所には次のような記述が含まれています。

“引用した研究論文には、気候変動を温暖化ガスのせいにする明確な証拠は全く見られなかった。”

published version:
• “None of the studies cited above has shown clear evidence that we can attribute the observed [climate] changes to the specific cause of increases in greenhouse gases.”

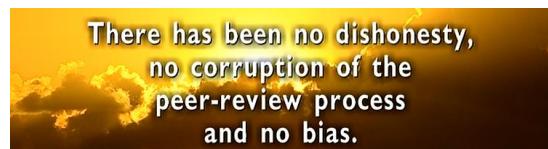
“今までの研究では、観察された気候変動の一部または全部を明確に人為的原因に帰することは出来なかった。”

• “No study to date has positively attributed all or part of the climate change observed to date to anthropogenic [man-made] causes.”
• “Any claims of positive detection of

サイツ教授は、「ピア・レビューという専門家同士間の評価制度で、この IPCC の報告書につながる事件以上に人騒がせな改悪は見たことがありません。」と結論しています。

As president of both the National Academy of Sciences and the American Physical Society, I have never witnessed a more disturbing corruption of the peer-review process than the events that led to this IPCC report.
A comparison between the report approved by the contributing scientists and

これに答えて、IPCC は削除したことを否定しませんでした。しかし、報告書の不正や歪曲はなかったし、地球温暖化の原因の不確定性はそのまま残っていると云っています。この修正は、政府、科学者個人、および非政府組織 NGO からのコメントに基づき行われたそうです。



(ピア・レビュー評価プロセスに不正・腐敗や変更はなかった)



(不確定性は残されている)



(修正は政府、科学者個人、および非政府組織 NGO のコメントによる)



「私が IPCC を辞職したとき、これですべてけりがついたと思いました。しかし、最終原稿を見たら私の名前がまだ残っていました。だから、私は名前を削除してくれるよう頼みました。ええ、彼らは、“私が寄与したのだからそのままにしています”と云いました。そこで、“私の云い分は全く聞き入れられなかったので、私は何も貢献しませんでした”と云いました。そして、ついにはほとんど口論になりました。最終的には、私が法的手段に訴えると脅したら、やっと私の名前を取り下さりました。これはよくあることだと思いました。

専門家の中には論争に同意できなくて辞めた人が大勢いることを知っていますが、彼らは著者リストにただ載せられたままで、世界のトップ科学者 2500 人の中に入っています。」

23. 国連の地球温暖化会議とこれを取巻く推進勢力

人為的地球温暖化の背後には強力な制度化した推進勢力が存在します。

ここナイロビでは、専任の役人、プロの NGO 活動家、カーボン・オフセット（排出された CO₂を森林吸収等で相殺する考え方）資金団体、環境ジャーナリスト等が集まって、気候変動について討議をするために 10 日間の国連主催の会議が開かれています。参加代表者の数は 6000 人を超えます。



「私の住んでいるところには、地方議会の地球温暖化担当職員がおり、ここには時代の流れに乗り遅れないように、何らかの形で参加しようと集まった人々のとても長い行列ができています。」



「数10億ドルも気候科学に投資されれば、このドルに依存する人の層も巨大になります。そして、いかに官僚的であろうとも、さらに発展させることを望むでしょう。」



「立ち上がって、“待てよ、これは冷静に、合理的に、かつ注意深く見直してみよう。どれほどのメリットがあって、どれほど続くだろうか”などという人は誰であれ排除されます。」



「古い英國のことわざに、“もしあなたがココヤシの実落としの中に立てば、あなたに向かって石が飛んでくる”というのがあります。私は同じようになると思っていますが、かなり難しく、かなり汚く、そしてとても個人的な中傷になっています。ええ、殺すという脅迫でも何でもあります。だから、自分の身体のためを思ってそんなことはやりません。」

24. 環境保護運動の躍進と弊害



「今日は、もし気候変動を取巻く“連禱の祈り”に疑いを持ったりしたら、あなたはたちまちホロコースト否定論者にされてしまいます。」



「私は、この地球温暖化ビジネス全部が宗教のようなものになっていると云いだした最初あるいは最後の人間ということは絶対ありません。でも、反対の人たちがそう呼ばれるなら、私は異端者です。この番組の制作者は全員異端者です。」



「環境運動は、実際はこの運動の政治的な行為であり、世界的なレベルで莫大な影響を及ぼしています。そして、今日では、政治家は誰でもそれを知っています。左派であろうとも、中道であろうとも、右派であろうとも、環境に対しては敬意を払わなければなりません。」



地球温暖化キャンペーンは大勝利を収めました。かつてはレジスタンスの砦であった合衆国政府も降伏しました。ジョージ・ブッシュは今や彼らの同盟者です。

西欧の政府は、今では、先進国および開発途上国のいずれにおいても工業生産を制限する国際協定が必要だということを受け入れました。

でも、費用はどれほどになるのでしょうか？

ポール・ドリーセンは元環境運動家です。



「地球温暖化についての私の最大の関心事は、おそらく地球温暖を防止するだらうと推し進められている政策が、世界の最貧困層の人々に壊滅的な影響を与えていることです。」（ポール・ドリーセン 作家）

25. 予防原則というまやかし

地球温暖化の運動家は、安全側に立つことは何の害ももたらさないと云います。仮に人為的気候変動説が誤りであったとしても、万一のことを考えて炭素放出を制限する厳格な基準を課すべきだと。

人々はこれを予防原則（precautionary principle）と呼んでいます。



「この予防原則はとても変わった野獸です。

元々は特定の協議事項やイデオロギーの推進のために使われていたのですが、今では常に一方向にだけガンガン鳴り響かせるために使われています。

それは、特定の科学技術を用いたとき、例えば化石燃料を使ったときのリスクについては語りますが、これを使わないことで生じるリスクは決して語りませんし、その技術のもたらす恩恵についてもまったく触れません。」

26. アフリカの発展に必要な電気が導入できない

アン・ムゲルは子供の食事を準備しています。



彼女のように電気のない生活をしている人は世界の人口の三分の一の 20 億人にものぼります。この人たちには、代わりに木や動物の糞を家の中で燃やします。屋内で発生した煙は世の中で最も汚染をもたらします。また、アンのような人は浄水が使えません。この結果、貧困国では毎年約 400 万の 5 才以下の子供が、呼吸器疾患や下痢で死亡しています。



「もし、現地の人に発展とは何かと尋ねたら、彼らは、“電気が来れば次のステップに上れることが分かっています”と答えるでしょう。

実際に、電気がないということはトラブルの長い連鎖を生み出します。

困ることの第一は明かりで、早く寝なければなりません。

明かりがないのですから、起きている理由もありません。

暗闇の中でお互いに話をするわけにもいかないということです。」 (ジェームス・シックワティ エコノミスト 作家)

冷蔵庫も近代的な包装もないということは、食品は保存できないことを意味します。小屋の中の火はとてもひどい煙を出しますし、暖房のための木の消費量は多くなりすぎます。お湯もありません。私たち西洋人にとっては、電気のない生活がどれほどひどいか想像もできません。

こんな生活をしている人々の寿命は恐ろしく短いのです。彼らの生活はあらゆる面で貧困化しているのです。

ここから数マイル先の豪華なゲートで囲まれた本部では、国連が地球温暖化の会議を開催しています。



土産物店が田舎の部族集落の土産を売っている傍らで、代表団らは持続的な発電方式といえるものを推進するにはどうしたらよいかと論議しています。



アフリカには石炭があります。また、石油もあります。

しかしながら、環境団体はこれらの低コストのエネルギーを使うことに反対運動をしています。その代りに、アフリカや第三世界のその他の人たちは太陽光発電と風力発電を用いるべきだと云っています。



27. 太陽・風力発電は高価で、工業化に役立たない

ナイロビから車で少し行ったところに最初の太陽電池パネルが見つかります。ケニアの保健局が、数か村の住人を診るために診療所用にと買ってくれたものです。



診療所の電気器具は電灯と冷蔵庫だけです。冷蔵庫はワクチン、薬それに血液が保管されています。

電気は二つの太陽電池パネルで供給されます。





職員 “で、うまくいっているのは何ですか？”

医者 “照明です”

職員 “照明だけですか？”

医者 “そうです”

職員 “もし照明と冷蔵庫などを一緒につけたら何が起きますか？”



医者 “警報が鳴ります”

職員 “警報が鳴るのですか？”

職員 “やって見せてくれますか？”

太陽電池パネルは、サミュエル・マワンギ医師に電灯か、冷蔵庫かいずれか一つずつの使用しか許しません。同時には使えません。同時に使うと電気は切れてしまいます。

風力発電と太陽光発電は電力の供給源としてはとても安定性が欠けております。また、コストは従来の発電方式よりも少なくとも3倍はします。



「問題は、ヨーロッパで何人の人が、米国で何人の人が、この種のエネルギーをすでに使用しているか、また、どれほど安価かということにならざるをえません。

いいですか、ヨーロッパ人にとっても高価であり、アメリカ人にとっても高価であるなら、ましてや貧困のアフリカ人についての話をしているのですから、ナンセンスだということはお分りでしょう。」

「金持ちの国なら、違った方式の高価な実験をすることも出来るでしょう。でも、私達にとっては、私たちはまだ生き延びるのに精いっぱいの段階なのです。」

元環境運動家のポール・ドリーズンにとっては、世界で最も貧しい人々に対して世界で最も高コストで非効率な発電方式しか使わせないという考えは、地球温暖化運動の最も道徳的反感を呼ぶ面です。



「一つ完全に明らかにしておきたいことは、もしも第三世界の人に風力発電と太陽光発電しか使ってはいけないと告げることは、実際には彼らに電気を持ってはいけないと云っていることと同じことなのです。」



「西欧の環境運動家と会うと、彼らは、私たちは太陽電池や風力エネルギーに取り組まねばならないと云いますが、私たちが挑戦している課題はどのようにしてアフリカを工業化させられるかなのです。

なぜなら、私には太陽電池でどうやって鉄鋼業に電力を供給できるのか分からぬし、鉄道輸送網に電力を供給できるか分からないからです。多分、小さなトランジスター・ラジオは動くでしょうけど。」

28. 環境保護活動はアフリカンドリームを葬った



「全ての環境の討論から分かった一つの明瞭なことは、アフリカンドリームを葬るのに熱心な人がいるということです。
アフリカンドリームは発展することです。」



「環境運動は最強の勢力に発展し、先進国を開発を阻止するまでになっています。」



「私達は、
資源に手を付けるな、
石油に手を付けるな、
石炭に手を付けるな
と云われています。これでは自殺です。」



「私は、彼らを反人間的と呼んでも正当であると思っています。人間が鯨より優れている、あるいは鳥やあらゆるものより優れている、と考えたくなければ勝手にそうしたらよいでしょう。

でも、人間を屑のようなものと考えたり、数十億の人を盲目にしたりあるいは死なせたりすることは絶対に感心できません。私はそれには共感できません。」

エピローグ

人為的地球温暖化説は今ではあまりに堅固になり、反対の声は効果的に沈黙させられています。

それは無敵に見え、いかに強固な反証に会っても乱れません。

地球温暖化の警鐘は、今や理性を越えてしまいました。



「例えば、“今世紀末までには、地球上で人間の住めるところは南極だけになるでしょう”と報じるような主席科学官が英国にいる限りは、“これでこの世はもう終わりだ”と信じる人はまだ存在するでしょう。

そして、人類は、南極に移住した繁殖カップルのおかげで生き長らえることが出来るかもしれません。

それは陽気で楽しいと思います。もしそれほど寂しくなければ本当に楽しいでしょう。」

With Thanks to
PROF TIM PATTERSON
PROF EDWARD J. WEGMAN
PROF BOB CARTER
DR WILLIE SOON
DR MADHAV KHANDEKAR
PROF WIBJÖRN KARLEN
DR HENRIK SVENSMARK
DR DICK MORGAN
DR FRED GOLDBERG
HANS H.J. LABOHM
STEVE MCINTYRE
DR ROSS MCKITTRICK
DR CHRIS LANDSEA

